

第10回 全国版 子どもの集い・交流会 実施報告

親&子どものサポートを考える会

11月19日(土)に『第10回 全国版 子どもの集い・交流会』を開催しました。昨年に引き続き、今年も新型コロナウイルス感染防止の観点から対面式での集会を避け、オンライン(Zoom)による全体会(講演と意見交流)として開催しました。

1. 当日の参加状況

参加者の都合でグループでの意見交流には不参加という方もおられましたが、子どもの立場の方18名、講師1名、スタッフ8名の参加で合計27名でした。

終了後のアンケートには13名の方から回答をいただきました(アンケート回収率72.2%)。参加者の居住地は、関東地方9名、中部地方3名、近畿地方1名でした。参加回数は、初回の方が5名、2回目4名、3回目以上の方が4名でした。

2. 当日の流れと全体共有での意見

当日はオリエンテーションの後、毎日新聞社・山田奈緒記者から「私もヤングケアラー?~イメージされているヤングケアラーとの相違~」というテーマでご講演いただいた後、当会代表・土田と対談を行いました。その後休憩を挟み、小グループに分かれて意見交換、全体共有という流れでしたが、それぞれのグループから出された意見に対して、ご講演いただいた山田記者と土田からコメントする形で全体共有の時間をもちました。

《山田記者からお話しいただいた概要》

- ・自己紹介
- ・ヤングケアラー・キャンペーン報道をするにあたり気をつけたこと
大変さだけでなく、様々な影響があること
ヤングケアラーとカタカナ表記にしたこと
- ・国の調査について
- ・相談することのハードルの高さなど

《全体共有で出された主な意見》

- ・ヤングケアラーということを外に伝えることのしんどさがある。外ではあえて元気にして使い分けをしている。
- ・入り口として「ヤングケアラー」という言葉はわかりやすいが、サポートというところで考えると課題はある。「学校の私」はそこでは相談しづらい。ケアをしているということが出しにくかったり、相談したい時期(年代)によって相手も変わる。相談しやすい場所はどんなのだろう?

- ・講演を聞いて今まではっきり言葉にできなかつたことが納得できた。10代の頃は相談するのが無理だった。言うてはいけないという思いや、親を裏切れないという思いがあつた。アンケートがあつても正確には答えられなかつたかもしれない。そのことが原因で学校に行けていない人はアンケートにもたどり着けない。
 - ・カウンセリングを受けることにマイナスのイメージがある。相談のしづらさ、ミルフィーユ状になっている。いろんなイメージ、考え方が重なっていくことで生きづらさや重さが増していく。
 - ・しっかりしている私を周りの大人はほめてくれた。やりたくない、もうできないと言つたら排除されてしまうんじゃないかという恐怖の中で生きてきた。
 - ・「助けを求めていいんだよ」という声かけは安心になるのか？「助けを求めるとはダメ人間」と思つていた。一緒に困ってくれる人が欲しかつたのかな、と今は思う。
 - ・資格うんぬんよりも、一緒に悩み、話を聞いてくれるだけでいい。そういう存在がほしかつた。
 - ・親のことも自分のことも知つてくれている人は信頼できる。話がしやすい。
 - ・母親が難病でベビーシッターが来てくれていた。遊んでくれる人がいたので母親を忘れる時間があつた。忘れられる場、子どもが子どもらしい時間を持つてるようにすることも必要。
 - ・声を本当にキャッチできるのか。その人のことを本当に知ろうとする意識を持つてもらふことが大事。
 - ・今、宗教2世のことが話題になっているが、自分には少なからず、そうした親の影響があつた。そんなことで困つていないか？
- 《山田記者と土田のコメント》
- ・ヤングケアラーという言葉は、入り口としてわかりやすい言葉ではあるけれど、支援はそう簡単ではないというところがある。ブームで終わりそうな懸念はある。伝え方の問題はメディア側の責任が大きいと思う。
 - ・公表しないと元気な姿を見せるとかは、生活していく上での選択のところではあると思う。

3. アンケート結果

1) 参加動機

今回の講演テーマである「ヤングケアラー」という言葉に関心を持たれた方もみえましたが、これまでもそうであつたように同じ立場の方とお話したいなど、全国の仲間とのつながりを求めて参加された方が大半でした。

2) 満足度

60%・・・1名、80%・・・5名、90%・・・2名、100%・・・5名

それぞれ、以下の理由が挙げられた。

《60%の意見》

- ・支援者の支援の方法などの話もあって当事者としては話しづらかった。

《80%の意見》

- ・自分と異なる世代の方の話を聴けたことはとても貴重だった。一方で同世代ならではの生きづらさ等の共有も貴重な経験であった。
- ・グループワークが少し物足りなかった。
- ・取材をされている方が聴取したお話や当事者としての経験、ヤングケアラーに関する考えなどをじっくり伺うことができよかった。参加者の方と交流し、実体験や話す中で感じたことの共有ができ嬉しかった。
- ・性別、年齢が様々な方のお話を聞くことができ、共感できることがたくさんあった。自分一人じゃない、と思えるだけでも肩の荷が少し楽になれた。
- ・山田さんの取材の話とご自身の体験の話など本心の部分も聞くことができた。小グループの時間も1時間あってよかった。

《90%の意見》

- ・ヤングケアラーの支援について、大変勉強になった。精神疾患の親を持つ子どもで特にケアをしていない人（ACE サバイバー）について、今後取り上げてもらえたら。
- ・山田さんの講演が率直でわかりやすかった。

《100%の意見》

- ・全国の皆さんに会えてよかった。
- ・様々な方とお話しさせていただき、いろいろな気づきや発見があった。
- ・率直な意見がたくさん飛び交っており、自分の気持ちを言語化する参考になった。
- ・人間学や日本の歴史、民族性も含め、ヤングケアラーの背景はとても奥深いと思った。精神疾患がある人を神様と位置付ける時代も日本にはあったそうなので、ある意味そういう柔軟な日本社会を取り戻すことでもヤングケアラーを少なくすることに繋がるのでは？と個人的に思い、凄く考えさせられる良いきっかけになった。
- ・取材をされている記者の率直な考えと支援者への投げかけを聞く機会はなかなかない。提起することにより自分の持つ考えを熟考する機会をいただけた。

3) その他の感想

- ・流れや内容はとても良かったが、休憩中に雑談したりできる対面開催の頃が懐か

しく感じた。

- ・ヤングケアラーという言葉とその受け止め方、みんなはどのように受け止めているのか知れてよかった。また、テーマに関わらずみんなの話が聞けて、また話せてよかった。
- ・みなさんとお話できる機会がたくさんありよかった。最後、全員の場で話せる機会もつながりを感じられてよかった。
- ・顔を出したくない方もいらしたと思うが、最後は顔を出しての共有、意見交換でちょっとほんわかした。

4. 全体を通しての総括

今年の集いは、三重の集いで「ヤングケアラーという言葉を知るとザワザワする」「一般的に持たれているヤングケアラーというイメージと違う」…と違和感を話されたことから、どんな風に皆が感じているのか、思いを語り合ってみようと思案しました。しかし、参加者の思いを聞いていると、「支援がどうこうよりも、一緒にいて安心できる存在が大事」だったり、「精神障害に対する理解など他の問題もあって、ヤングケアラーという言葉だけでは網羅できないよね」と話されていて、皆、冷静に捉えられているように感じました。子どもの方が感じる違和感を何とかせねば！と、ヤングケアラーという枠にとらわれていたのは私だったのかもしれない。

障害のある親御さんと暮らしてきた苦労や理解されにくさから感じる生きづらさも、「逆境的小児期体験」という言葉なら皆が共通して話せるよね…という提案があったり、弱みにつけ込む勧誘や宗教2世の話も出され新たな課題も提案されたように思います。

今回のアンケートにも継続開催を望む声が多く寄せられました。参加者のニーズや関心がどこにあるのか把握させていただきながら、次年度も開催できればと思っております。ご後援をいただきました関係機関の皆さま、本事業開催について多大なご協力をいただき、ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

2022年12月吉日

親&子どものサポートを考える会

世話人代表 土田 幸子